

自己拡張を実現するためのデジタルメディアの可能性

中館 俊一 シュティフ ロマン 金 群
早稲田大学人間科学学術院

Will Digital Media Lead to Self-Extension?

Shunichi Nakadate, Roman Y. Shtykh, and Qun Jin

Faculty of Human Sciences, Waseda University, Japan

{k-g-t@asagi., roman@akane., jin@}waseda.jp

概要 本稿は、「人間は常に自己拡張を求めると」という考えに立脚し、デジタルメディア利用によっていかに自己拡張が行えるかの可能性について論じるものである。まず、人間の特性から自己拡張とはどのようなものかについて考える。次に、近年大きな注目を浴びているモバイル SNS を自己拡張ツールとしてとらえ考察を行い、人間の潜在的な能力を究極的に発揮し、自己拡張を実現するためのデジタルメディアの創出への議論を投げ掛ける。

1. 自己拡張とは

M.マクルーハンは交通・通信技術の発達による人間の「身体的拡張」を説いたが[1]、我々の考える自己拡張とは、生物の存在意義は生殖による自己遺伝子の保存、つまり自己存在の拡張であることを前提としており、これはダーウィンの『種の起源』における「われわれの周囲にあるどんな一つの生物も数を増やすためにおよぶかぎりの努力をしているという」[2]という記述に根拠を求めたものである。そこからのアナロジーで、人間は他の動物と異なり社会という環境に生きており、そこでは道徳観・倫理観によって生殖行為に制限が設けられているため、人間の生殖本能が産み出す自己拡張欲求に未処理部分が生じたが、本能的に自己拡張欲求が基底されている人間は、どうにかして自己存在の拡張を実現しようとした結果、社会的動物ゆえ、社会における精神的自己拡張を求めようになったとするものである（もちろん、生殖行為も他の動物同様に、人間にとっても純粋な自己拡張である）。例えば、人間は遺産相続などといった社会的理由から生殖を行う場合がある。つまり、本来生物が自己遺伝子の保存のみを意図して行っていた生殖行為を、人間は社会的側面も考慮して生殖に至っているということになる。生殖自体に社会的拡張性を持たせているこのような事例から、人間にとっての社会における自己拡張の重要性が推測できる。

前述のように、人間の生活基盤は社会であるため、人間は常に社会にさらされている。同時に、社会は自己拡張の場でもある。したがって、人間は常に自己拡張を求めることができている状態にある。社会における自己拡張は多岐に渡っている。例えば、他人に自分のことを知ってもらったり親しくなったり、または世間において有名になったりして、自己を他人の意識下に認めさせる「存知的自己拡張」、自分の感性や世界観、宗教観を他人と共有し、自分の思想

を広める「思想的自己拡張」、資産・権力の増大により、社会における地位を誇示する「権威的自己拡張」などが考えられる。本稿は「存知的自己拡張」に焦点を当て、これにいかんしてデジタルメディアが寄与できるかについて考える。

2. 存知的自己拡張実現のためのデジタルメディア

「存知的自己拡張」を実現する上で重要な活動はコミュニケーションと考えられる。コミュニケーションとは、個体間の意志・意識・感情などの情報を伝達することである。近年注目を浴びている SNS (Social Networking Service, ソーシャル・ネットワーキング・サービス) は、そのようなコミュニケーションに大きく寄与するものである。SNS と一口に言っても様々なものがあるので、ここでは mixi のようなコミュニケーションに特化したものを想定する。

SNS 上で日記を書くという行為は自分の意見・感想を他者に伝えることであり、それは他者に対して自己の存在表示をすることになる。そして、その日記に対してコメントされることにより、他者によって自己が認識され、正確なインタラクションが実現されたことに満足し、自己が他者の意識下に存在することを確認でき、自己拡張が実現される。これはまさに「存知的自己拡張」である。また、SNS 上での現在の友達の数 (mixi で言うマイミク) が数字として表示されることにより、自分と他者との繋がりが具合を視的に把握できる。つまり、この数値がユーザーの自己拡張度合いを定量化しているということである。

また、現在、日本を始めとする先進国において日常生活で携帯電話をはじめとする携帯情報端末(PDA)を携帯することは珍しくなく、携帯せずには「普段」と同じ日常生活が送れないというヘビーユーザーが多くいることだろう。もし一日携帯情報端末を携帯していなかったら、「普段」連絡を取り合っ

いる相手と、「普段」のようなインタラクションが不可能になる。それはもはや、からだの一部が損傷することによって「普段」とは違う身体感覚に陥ること、例えば足を負傷することで「普段」と同じように歩けないことと同じようなことであり、携帯情報端末が身体性を有したと言えるのではないか。つまり、携帯情報端末はユーザーのコミュニケーションツールとして日常生活において拡張的に根ざしているということである。また、携帯情報端末によるモバイル SNS(以下略して MoSNS)はパソコンでの SNS に比べ格段に即時性に優れているので、より充実した自己拡張が可能となる。このように、SNS の自己拡張実現度と身体性を拡張的にもたらされた携帯情報端末を組み合わせた MoSNS は、自己拡張に適したデジタルメディアと言えるだろう。

3. より自己拡張メディアとして特化するには

MoSNS はその機能や基本概念において、自己拡張に一役買うことは確かであるが、より自己拡張に特化したデジタルメディアとするには、どのような改善点が考えられるか。

まず、携帯情報端末のユーザビリティの問題がある。携帯電話をはじめ、携帯情報端末は総じて画面が小さいため操作のスムーズさに支障をきたすことが往々にあり、インタフェースにおいても、小さなタッチボタンを押したり、スクロールキーによる細かい画面切り替えをしたりするなど、煩わしさを感じざるをえない。この点はパソコン利用時には解消されるが、前述のような MoSNS ならではの利点を考えると、安易にパソコンの方が良い、とも言いきれない。現に、mixi が携帯電話からの登録サービスを開始したところ、3日で10万件の登録を記録したという事実[3]からも、MoSNS の需要の高さがうかがえる。しかも、携帯情報端末のユーザビリティの研究は多く行われており、将来的に大きく改善されるだろうという楽観的な見方もできなくはない。

また、MoSNS に限らず、SNS 全体に関わる問題としてプライバシー保護がある。mixi においても、少なからず個人情報流出による問題が噴出している[4]。mixi は運営当初は本名による登録を推奨していたが、現在は本名登録やプロフィールの記載内容に注意を喚起している[5]。このような現状から考えて、mixi において本名での活動は難しいものとなっている。

本名でなくても、SNS 上での現在の人間関係の維持は可能である。また、偽名によるコミュニケーションによって人間関係が築ける点も SNS の利点と言えばそうかもしれないが、その場合これまで本名によって築いてきた社会的アイデンティティは顔をひそめ、そのコミュニケーションは社会的認知を受けている社会的自己の拡張の蓄積にならず、偽名という、もう一人の自己による拡張にしかならないと考

えられる。しかし、本当に偽名のコミュニケーションは社会的自己の自己拡張にならないのかどうか、この点は今後の検討課題になり得るだろう。

4. 考察・討論

SNS をはじめとするデジタルメディアは、自己拡張実現に適した基本要素をもち、人間の潜在的な能力を究極的に発揮し、自己拡張を実現する可能性を秘めているが、多くの課題がある。

人間の社会には法的・倫理的・物理的(身体的)拘束など、人間の表現を束縛する足枷が多く存在する。そうした拘束の下に現れる自己を「社会的自己(外面的自己)」とし、社会的拘束によって抑圧された自己を「内面的自己」とする。社会的自己は、通常の社会生活によって自己拡張が実現される。一方、内面的自己は社会生活上での解放が困難である。そのような性質を考慮し、デジタルメディアを内面的自己、つまり普段の生活上では発揮されない自己解放の場として機能させ、内面的自己拡張を実現させることが可能となるのではないか。例えば、偽名・匿名が主流となった今でも mixi は 2007年5月末の時点で、オープン以来3年3ヶ月で登録ユーザーが1000万人を突破する[6]など、好調である。また、セカンドライフのように、完全に現実の物理世界から離れたメディア空間における、社会的自己によるものではないコミュニケーションが人気を博しているという事実から、デジタルメディアによる自己拡張において、偽名・匿名あるいは社会的自己とは違う人格によるコミュニケーションが求められていると考えられるのではないか。だとすれば、どのようなものが最適と考えられるか。また、偽名によってデジタルメディアでの自己拡張が行われた場合、内面的自己拡張は実現されるが、社会的自己にとっても自己拡張される可能性も考えられるか。社会生活とデジタルメディアによって社会的・内面的に自己拡張が実現させられれば、人間は両面的自己拡張されることになり、「本来自己」が拡張されたと言えるのではないか。

今日のデジタルメディアの趨勢を見る限りでは、今後充実した内面的自己拡張メディアが創出される可能性は十分に考えられると期待する次第である。

参考文献・URL

- [1] マーシャル マクルーハン (栗原裕・河本仲聖訳), 「メディア論」, みすず書房 (1987年)。
- [2] チャールズ ダーウィン (八杉龍一訳), 「種の起源(上)」, 岩波書店 (1990年)。
- [3] <http://plusd.itmedia.co.jp/mobile/articles/0612/13/news059.html>
- [4] <http://www.nikkeibp.co.jp/sj/2/column/c/17/index.html>
- [5] <http://japan.internet.com/atlas/20061013/26.html>
- [6] <http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0705/21/news048.html>